

## 研究推進校事業報告書

### <取組と成果のポイント>

#### (1) 授業づくりについて

- ・発問集をつくる活動を全教員で協力して行ったことで、教材ごとに有効な中心発問や補助発問づくりができた。発問に対する児童一人一人の発言を、教員が大切に扱うようになった。
- ・議論を深めるための繰り返し発問を工夫し取り入れる教員が増えたことで、児童が話し合うことを楽しみ、考えを深めるようになった。

#### (2) 評価について

- ・評価の三つの視点について全教員で共通理解を図り、発問やワークシートに反映させたことにより、明確に児童の考えの変容や深まりを見取ることができた。

#### (3) 自作の地域教材、指導事例の開発について

- ・学年の発達段階に合わせ、常滑の偉人を教材化し、該当学年の年間計画に位置付けることができた。

### 1 研究推進校の概要

学校名	所在地	電話番号	児童数	備考
常滑市立常滑東小学校	常滑市瀬木町4丁目の100番地	(0569)35-2428	841人	

### 2 研究課題

- (1) 考え、議論する道徳を目指した、発問、繰り返し等の手立ての工夫及び指導方法の研究
- (2) 道徳科の授業における評価方法の研究
- (3) 地元の偉人を扱った教材、指導事例の開発

### 3 研究主題

『特別の教科 道徳』を要とした道徳教育の充実  
—カリキュラム・マネジメントを生かした効果的かつ多様な指導方法と評価の工夫・改善—

### 4 研究のねらい

常滑東小学校では、「笑顔あふれる、安全で安心な常滑東小」をスローガンに掲げ、児童理解を念頭に全教職員の創意と協働により、一人一人を徹底的に大切にする教育、目指す児童像である「心の温かい、優しい子ども（心）・なぜと考える、筋道を立てて考える子供（知）・互いに力を合わせ、自主的に行動できる子ども（行）」の教育の具現に努め、教育活動に取り組んでいる。

本校の学区では、児童のほとんどが、新興住宅地域に住んでいる。新興住宅地域のため、地域のつながりが薄く、コミュニケーションの希薄化が課題となっている。また、自分の思いや気持ちをうまく表現できない児童、相手の気持ちをくむのが苦手な児童が少なくなく、学級への所属感や自己肯定感を高められず、自信をもって意欲的に取り組むことができない児童が多い。

そこで、本校では、現職教育として28年度から「自信をもって意欲的に活動する児童の育成」を

テーマにして取り組んできた。学年や学校の行事などで認め合う活動を展開する中で、自分にも友達にもよいところやできることがあると気づき、互いの長所や役割を知り、自己肯定感や所属感を育むことにつながった。

しかし、29年度の学校評価での児童アンケート結果では、「挨拶がしっかりできている」の項目で、「そう思う」と答えた児童が52%と少なく、保護者も37%という結果であった。また、「きまりを守って生活している」の項目では、3割の教職員が不十分であると回答していた。主として人との関わりに関する観点の礼儀の基本となる挨拶や、集団生活の基礎となるきまりの遵守については、本校児童の課題であることが明らかになった。

さらに、本校児童の多くが、転入者の多い新興住宅地域に居住していることから、常滑の歴史や伝統について知っている児童が少なく、常滑を「ふるさと」として意識している児童が多いとは言えない。このような本校児童の課題を解決していくためには、郷土への愛着心を育む教材の開発を行い、道徳教育を充実させる必要があると感じている。

「特別の教科 道徳（以下、道徳科）」がスタートの年となる今年度は、児童が主体的に考え、議論することができ、児童自らが望ましい価値観を追究できる道徳の授業が求められている。そのような中、今年度の本校の担任の8割が教職経験10年未満であり、指導経験が浅く、道徳の授業力向上も、課題となっている。

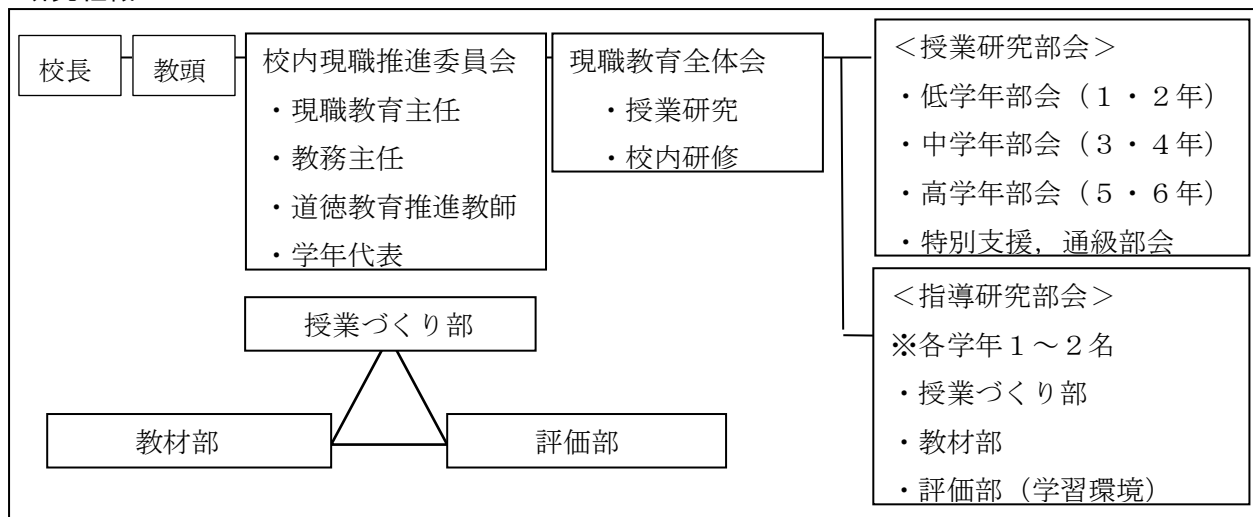
以上のことから、考え、議論する道徳を目指した、発問や切り返し等の工夫・改善、児童のよさを見つけ、伸ばす評価の工夫、郷土の偉人を扱った教材、指導事例開発について研究を進め、本校児童の課題を解決していきたい。

## 5 研究の概要

児童が主体的に望ましい価値観を追究できるように、道徳科における指導方法と評価の工夫、改善について取り組む。外部講師を招いた研修と校内研究体制を確立し、教員の授業力向上を図る。また道徳科の授業を要とする道徳教育を、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動、学校行事などと関連付け、学校の教育活動全体で推進する。

## 6 研究構想図 10頁へ掲載（資料1）

## 7 研究組織



## 8 研究計画

月	実施内容	行事等
5月	・現職推進委員会 ・現職教育全体会 ・提案授業① ※道徳教育推進教師の授業 ・特設授業指導案、公開授業指導案検討会	・運動会
6月	・意識調査アンケート実施 ・学校訪問②低学年部会3年、③高学年部会6年 ※市教育委員会指導主事参観 ・授業研究④2年	
7月	・現職教育報告会 ※1学期の取組に対する資料収集と分析、改善点の考察	・野外教育活動
8月	・現職（道徳科）スキルアップ研修 ・地域教材開発	
9月	・全校道徳科公開授業 ・授業研究⑤1年 ※外部講師による現職教育研修会	・保護者への公開授業
10月	・授業研究⑥4年 ※外部講師による現職教育研修会 ・授業研究⑦5年 ※外部講師による現職教育研修会	・修学旅行、社会見学
11月	・県道徳教育推進会議視察	・学習発表会
12月	・現職教育報告会 ※2学期の取組に対する資料収集と分析、改善点の考察	・親子ふれ合い みぢかの会
1月	・現職スキルアップ研修等 ・意識調査アンケート実施	
2月	・現職推進委員会	・6年生を送る会
3月	・現職教育全体会 ・成果報告書作成	・卒業式

## 9 指導研究部会（3部会）の取組

### (1) 授業づくり部会

#### ① 児童の実態を踏まえた全体計画、別葉、年間指導計画の作成

年度当初に、学校行事や児童の学習に合わせて年間計画や別葉を見直し、各教科、諸行事と道徳科との関連を図り、共通理解を図る。

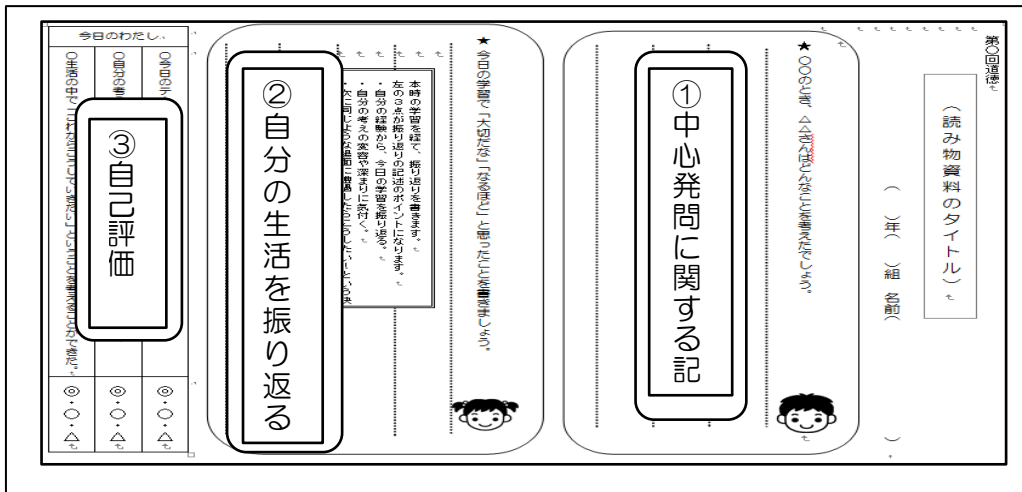
#### ② 考え、議論する道徳科を目指した指導方法の研究

- ・実践した授業で、児童が「考え、議論する」ことができた発問を発問集として残す。
- ・中心の発問だけでなく、児童の考えが広まったり深まったりする有効な補助発問も記す。

### (2) 評価部会

#### ① 道徳科における学習記録の累積の工夫

- ・ワークシートを使用し、学習の記録を残す。ワークシートはファイルにとじて累積する。
- ・ワークシートの項目立て（①主発問に対する自分の考え、②学習のまとめ、③自己評価）を統一する。



ワークシート例

② 道徳性向上を読み取るための評価の視点と考え方

ア 評価の視点

- ・自分自身との関わりをもって、考えを深めているか。(自我関与)
- ・自分と異なる意見を理解しようとしているか。(多様さへの気付き)
- ・考え・議論することで、道徳的価値の理解を深めているか。

イ 評価の考え方

- ・横断的評価…様々な内容項目の道徳科の授業を横並びにして、突出したところをよさと認める。
- ・縦断的評価…同じ内容項目を時間的に縦に並べて、進歩の状況を認める。

ウ 評価文例シートを作成し、評価の一助とする。

(3) 教材部会

① 郷土への愛着を深めるため、地元の偉人を扱った教材、指導事例の開発

○「明るい心」「明るい人生」に掲載されていた教材を改編し、教材化した。

- ・鯉江方寿 (常滑焼の陶祖) ・伊奈長三郎 (INAXの創始者、初代常滑市長)
- ・盛田善平 (pascoの創業者、鈴溪義塾塾生)

○常滑の「鈴溪読本」をもとに、地元の偉人を扱った教材の開発を行った。

- ・石田退三 (元トヨタ自動車会長) ・溝口 幹 (鈴溪義塾塾長)
- ・盛田命祺 (鈴溪義塾創設者)

10 授業研究部会による授業実践

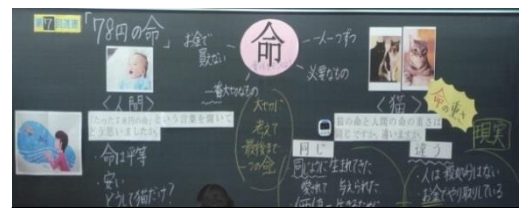
〈6年生の実践 6月4日〉

主題名・教材名 生命の尊重 「78円の命」

ねらい 動物と人間の命の重さについて考え、自他の成長を大切にする心情を育てる。

今回の授業では児童のさまざまな発言を想定し、指導案に反映させた。また、それぞれの児童の反応に対する切り返しや補助発問も指導案に記載することで、より明確に授業の構想を練ることができた。

授業では、意図的指名も取り入れ、多様な価値の意見を引き出し、板書にも生かすことができた。



児童の意見を分類して示した板書

猫の命と人間の命の重さについて、児童の予想される発言	
<p>&lt;同じ&gt;</p> <p>・私は、ペットを飼っていて、一緒に生活する中で家族のように大切に思うから同じ。</p> <p>・一つしかない命というのはみんな同じだから同じ。</p>	<p>&lt;違う&gt;</p> <p>・人は、動物をペットとして飼っているから、人の命の方が大切。</p> <p>・猫の命のことも食べることもあるし動物より人間の命の方が大切。</p>
教師の準備した補助発問・切り返し	
<p>「猫も人も、平等に扱われているのだから、人間の命を大切にしようか。」</p>	<p>「猫も人も、平等に扱われているのだから、人間の命を大切にしようか。」</p>
<p>&lt;主発問における授業事項&gt;</p> <p>①自分を振り返らせるための工夫          日常の生活の中で、自分がどのように他の生き物と関わっているのかを考えさせる。</p> <p>②争論が深まるための補助発問の工夫          同じという意見が多かった場合は、他の生き物についても考えることができるよう切り返し、命の重さについての多様な意見を引き出す。</p>	
<p>評命についてどのように考えているのか自分の言葉で表現している。          (発表、ワークシート)</p>	
児童の反応を想定し、分類して表記した指導案	

T: **中心発問** 命の重さって猫と人間と同じですか。違いますか。

C: 猫も人も、命は同じ価値をもっている。

T: そうだね。「同じように」愛されて、うまれてきたんだね。「重さ」とか「価値」という言葉を使って書いた人いる？

C: 猫も人間も生きるという権利をもっているから、命の価値は同じだと思う。

T: **補助発問** どんな命も平等に扱われているのかな。

T: ○○くんは、「違う」にしていたね。「同じ」という人、ちょっと聞いてみて。

C: 人を殺害するとニュースになるけれど、猫を殺害してもならない。

C: 人の命はお金で買えないけれど、猫はお金で買える。

C: 命の重さは平等だけど、平等と見られていないと思う。もし平等なら、ペットなど売られていない。(T: 教師 C: 児童)

○研究協議会より

- ・はじめは「同じ」という意見が大半を占めていたが、補助発問として投げかけた「どんな命も平等に扱われているのかな。」という問いが、立場の違う児童の考えを引き出すことにつながった。
- ・ワークシートの記述から、「同じ」だとは思いうけれど、「違う」側面にも気付けた児童がいた。

●次回への課題

- ・児童の発言を想定して授業を組み立てることで、板書が見やすく児童も活発に発言する姿が増えた。
- ・今後は、ファシリテーターである教師が児童の意見をつなぎながら、道徳的価値を追求していけるようになることよい。
- ・ねらいにどこまで迫れたかを評価する視点や方法を考える。

〈1年生の実践	9月21日〉
主題名・教材名	ほかの国の友達 「ぼくとシャオミン」
ねらい	他国の人々に親しみを持ち、自分たちと異なる文化のよさに気付いて、積極的に関わっていこうとする心情を育てる。

1年生の実践では、外部講師の先生に参観いただき、評価の視点や方法について、ご指導を受けた。次頁は、児童Aの発言やワークシートの記述と評価の文例である。

○研究協議会より

- ・ティージェンズ、さんざし、中国語など、インターネットで動画を見たり、実物に触れたりすることができたため、他国の文化を身近に考えることができていた。
- ・「なぜ仲よくなったか」よりも、「どうやって仲よくなったか」の方が、ねらいに迫ることができる。

【児童Aの授業の様子と評価文例】

T：（ティージェンズの映像を見て）どう思いましたか？

A：おもしろそう。

〔略〕

T：中国語を聞いて、どう思いましたか。

A：いろいろ（な言い方が）あって、おもしろい。

〔略〕

T：ぼくとシャオミンは、なぜ友達になったのだろう。初めからなりたいたいと思っていたかな。

A：興味がない。

T：どうして？

A：中国の言葉も分からないし、しゃべったこともないから

〔略〕

T：中国の友達ができたら、一緒に何をしたい？

（他の児童の発言：サッカー、図工、ティージェンズ、ゲーム、日本語を教えてあげたい）

A：中国の友達の話を聞いてあげる。

【ワークシートの記述】：なんか遊びたくなってきた。ティージェンズをしてみたい。

★児童Aの授業中の発言から、他国の文化には興味をもっているものの、他国の人との関わりには、消極的な反応だった。上記の下線部の発問の後、友達の発言を聞いて、考えが広がった。

【評価文例】

「ほかの国の友達」というテーマの学習では、自分たちと異なる文化に興味をもっていました。特に、教材『ぼくとシャオミン』では、友達の意見を聞く中で、他の国の人と関わりをもつことに興味をもち、他の国の人と仲よくしたいという気持ちが強くなりました。

○講師の先生によるご指導

① 低学年道徳科の難しさ

- ・発問に対する発言の難しさ → 語彙の少なさと表現の未熟さ
- ・生活経験のない授業の難しさ → 教材と児童の距離

② 内容項目の深い理解の重要性

- ・小学1年生から中学3年生までの内容項目の発展性の理解
- ・小学1年生の段階でのゴールは何か → まず外国の方に親しもう

③ 授業改善

- ・ある児童の「興味がない、中国の言葉も分からないから」の発言を取り上げ、教師が「では、どうしたら友達になれるの」と深めていくこともできる。

〈4年生の実践 10月10日〉

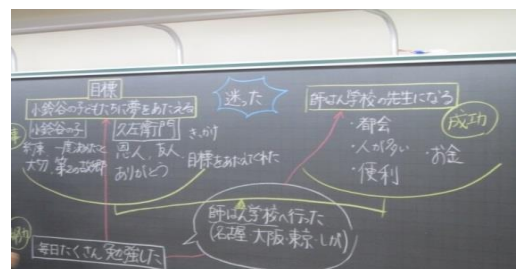
主題名・教材名 努力と強い意志 「もくひょうに向かってー溝口 幹一」

ねらい 自分で立てた目標に向かって、強い意志をもちやり遂げようと努力する態度を育てる。

4年生の実践では、指導研究部会で「郷土の偉人」をもとに作成した教材・指導案を用いての授業実践を行い、講師の先生にご指導いただいた。

○研究協議会より

- ・「師範学校の先生になる」ことで出世するということが、児童にはピンときていなかった。
- ・教師が、町の小学校教員と師範学校の先生との対比を児童に分かりやすくするために、プロ野球と少年野球の監督の例えをしたことで児童はイメージをしやすかった。



偉人の心の揺れ動きを構造化した板書

### 【郷土の偉人の授業記録】

- T：中心発問師範学校の教師になったあとに、幹の心が迷っていたのは、なぜでしょう。  
C：一度決めた目標があるのに、やめてしまうのは意味がないと思った。  
C：必ず戻ると言ってしまったから。  
T：誰に？  
C：小鈴谷の子たち。  
C：小鈴谷に帰らないと、子供たちに夢を与えることができなくなるから。  
C：久左衛門に力を貸して欲しいと頼まれたから。  
C：小鈴谷に帰らないと、子供たちに夢を与えることができなくなるから。  
C：久左衛門に力を貸して欲しいと頼まれたから。  
T：補助発問幹さんにとって、久左衛門ってどんな存在？  
C：恩人。 C：友人。  
C：こんないい子供たちに会わせてくれてありがとう。  
T：なるほど。感謝している存在なのかな。  
C：小鈴谷に行くきっかけを作ってくれた人。  
T：幹さんの人生を変えた大きなきっかけとなった人なんだね。  
C：目標を与えてくれた人。  
T：大きく関わっているね。では、幹さんにとって小鈴谷の子供や土地は、どんな存在かな。  
C：大切な場所。 C：第二の故郷。  
T：久左衛門の存在や小鈴谷という存在を思って、迷ったんだね。  
補助発問でも師範学校の先生の方が、お金もたくさんもらえるよ。本当に小鈴谷でいいの？  
C：お金より、小鈴谷のみんなの方が大事。

#### ○講師の先生によるご指導

- ・偉人伝は、偉人たちの「熱い思い」に触れることが大切。
- ・中心発問は、「幹が迷っていたのはなぜか」よりも「幹を小鈴谷に止まらせることになったものは何か」の方が適当ではないか。
- ・偉人伝の扱いについては、導入で児童の感想を聞き、そこから児童と話し合いたいところを見つけていく授業としてもよい。教師が最も話し合いたい箇所は予めしておくことは必要である。
- ・終末は、鈴溪の卒業生を紹介するより、「鈴溪にはどんな出身者がいるのか、調べてみよう」と終わるのはどうか。また、夢や努力についての書や詩を紹介する方法もある。

## 11 研究を支える取組

### (1) 外部講師を招聘した授業改善（詳細は11頁へ掲載…資料2）

教員の授業力向上を図るため、外部講師として、竹井秀文先生（名古屋市立下志段味小学校教諭）、前田治先生（愛知学泉大学教授）をお招きした。主に参考になったことは次の点である。

[発問] …教師が児童と考えたいことを見つけ、児童の問題意識を喚起する発問で発言を促そう。

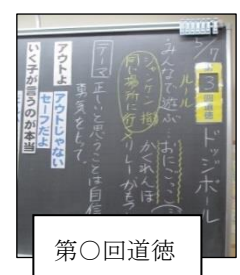
[板書] …児童の考えを分類・比較し、新しい考えが見つけられる板書を示そう。

[目指す授業] …児童が自分の生き方につなげられる、理想の姿を語れる授業を目指そう。

### (2) 毎時間の授業を支える学習環境の整備

#### ① 第〇回道徳の掲示

年間35時間（1年34時間）の道徳科の時間の確実な実施に向け、道徳科の授業では黒板に「第〇回道徳」と掲示している。担任も児童も、道徳科の授業を大切にするとともに、積み重ねを実感できるようにしている。





② 既習の内容項目の掲示

道徳科の内容項目は、四つの視点から分類・整理されている。各学年の廊下には、道徳科の授業で学んだそれぞれの教材名を付せんに記し、随時掲示している。掲示していくことで「授業の足跡(あしあと)」を視覚的にも実感できるようにしている。



(3) 保護者との連携

学校と保護者とが連携することで、児童の道徳性を養う基盤が強固になると考える。本年度は道徳科実施の初年度であり、保護者の本校の道徳教育に対する関心も高まっている。そこで、9月の授業参観日を活用し、全校一斉に道徳科の公開授業を実施した。(9月11日 第5限)

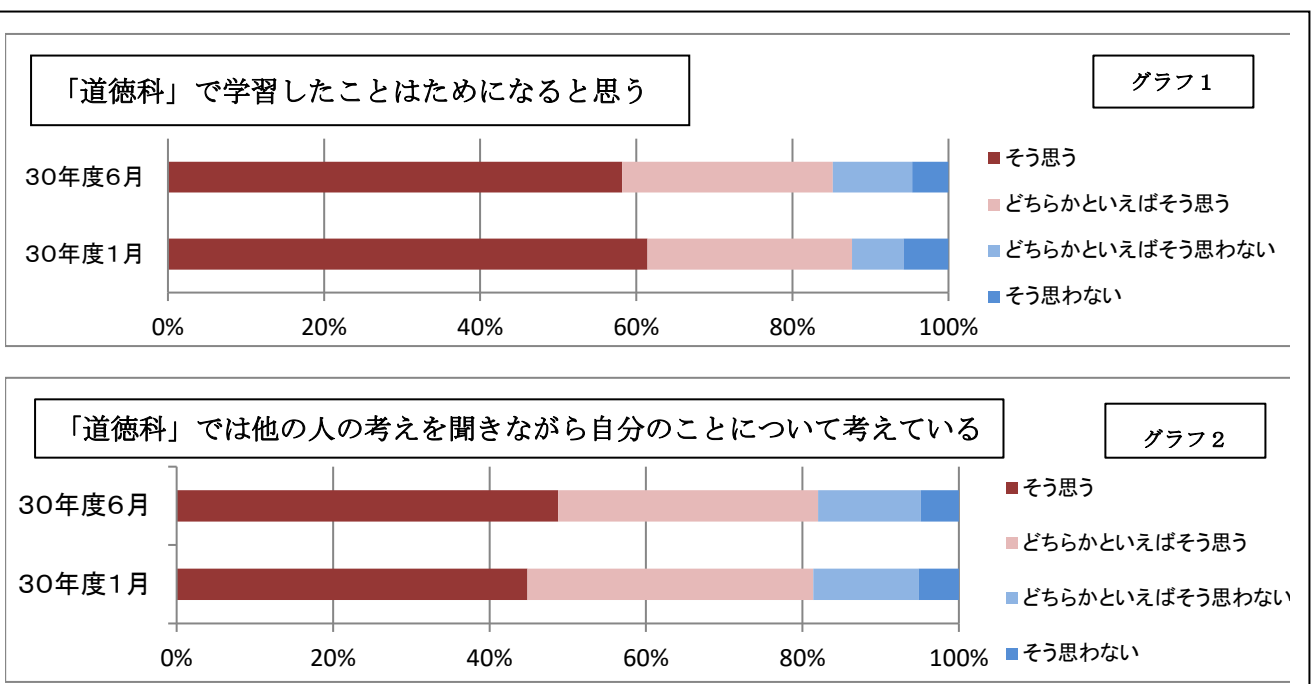
当日は、各学級に保護者向けの授業参観カードを用意した。感想には、児童が一人一人考えをもち、その考えを伝え合う場を参観できてよかったと記述されたものが多数あった。また担任が考え議論する道徳科の授業に取り組んでいることを感じ取っていただけたことも担任の励みになった。

今後も、授業参観で児童の姿を見ていただいたり、児童の道徳科ノートの感想にコメントしていただいたりすることで、学校と保護者が連携し、児童の心の成長を支えていきたい。

12 調査から見られる成果と課題

6月と1月に意識調査を行った。グラフ1の「道徳科で学習したことはためになると思う」という質問に対し、「思う」と回答した児童が85%から88%に増えた。これは、担任が日々の道徳科の授業を粘り強く積み重ねて取り組んできた成果である。児童が道徳科の学習の意義を理解している。

一方、グラフ2の「道徳科では他の人の考えを聞きながら自分のことについて考えている」という質問に対し、「思う」と回答した児童が82%から81%で伸びが見られなかった。担任は考え、議論する道徳を目指し、発問や切り返しを吟味し授業を実践してきた。しかし担任の発問に対し児童が発言するにとどまり、意見をつないで議論を深め、ねらいとする価値に迫るまでには至らなかったと考える。ねらいを明確にし、児童が自己の生き方を見つめられる授業へ改善を図る必要がある。





他の項目では、肯定的な意見は高い割合を示しているものの、学年によってアンケート結果が下降した項目がある。3年生では「むずかしいことでも挑戦している（86.1→80.4%）」「正しいことは自信をもって行うことができる（81.9→78.4%）」、4年生では「誰に対しても同じように、接することができる（79.4→73.6%）」「決まりをしっかりと守ることができる（88.7→82.7%）」であった。5年生では、「集団の中でも自分の役割を自覚し、進んで取り組むことができる（79.0→69.0%）」、6年生では「よいことや悪いことを自分で判断し、責任ある行動がとれる（86.0→78.0%）」であった。この1年間、担任は議論を深めることで児童自ら高い価値観を追求できる道徳を目指して授業を推進し、児童はそれに答え、回を重ねるにつれて意欲的に発言できるようになってきている。それを考慮すると、以上の結果は、道徳の授業を積み重ねて行く中で、児童が自分自身の生き方を振り返り、自分に厳しくなってきた表れであると考えられる。児童は自分を見つめる中で、自己の足りない部分に気付くようになってきている。この結果を生かして今後は、担任が児童一人一人の長所や持ち味を的確に見つけ、児童を褒め、認めていくことが大切であると感じた。

担任は、今年度の道徳授業において、多面的・多角的な考え方ができるような話し合いを取り入れた授業をしたり、意図的な指名を取り入れながら、児童から前向きな意見を引き出したりする授業を実践できるようになってきている。日々の道徳科の授業を積み重ねて、担任と児童との信頼関係を築き、児童の自己肯定感を高め、自信をもって生きていける児童を育成していきたい。

また全校体制で、カリキュラム・マネジメントの視点をしっかり踏まえ、道徳科の授業を要とする道徳教育を、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動、学校行事などに関連付け、学校の教育活動全体で推進し、児童の道徳性を養っていく。

### 13 これまでの成果と今後の課題 ○成果 ●課題

#### (1) 授業づくりについて（授業づくり部）

- 発問集をつくる活動を全教員で協力して行ったことで、教材ごとに有効な中心発問や補助発問づくりができた。発問に対する児童一人一人の発言を、教員が大切に扱うようになった。
- 議論を深めるための切り返し発問を工夫し取り入れる教員が増えたことで、児童が話し合うことを楽しみ考えを深めるようになった。
- 作成した発問集を活用した実践を重ねることで、さらなる改善を図り、今後もよりよい発問や切り返しを練り上げていく必要がある。

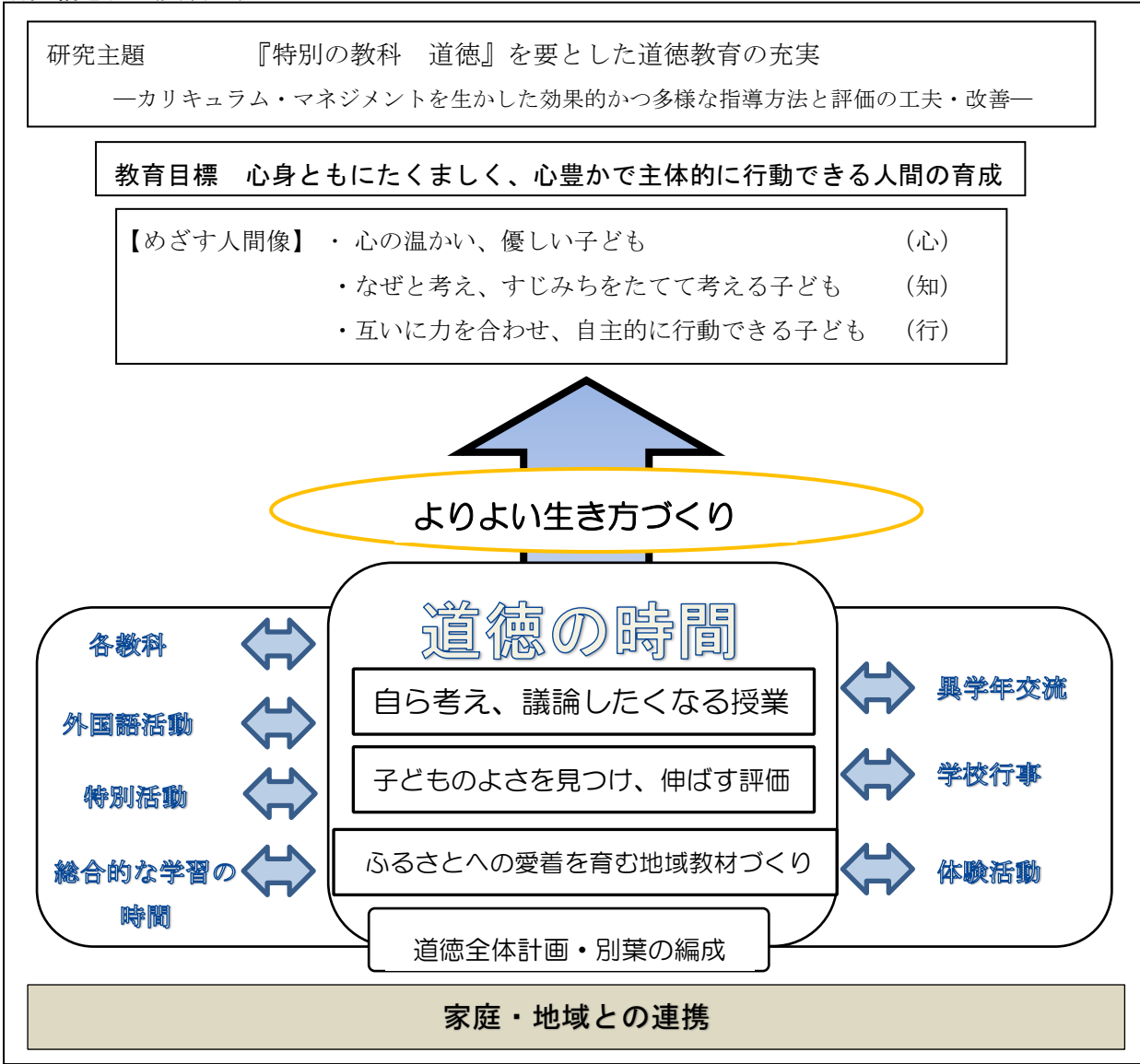
#### (2) 評価方法について（評価部）

- 評価の三つの視点について全教員で共通理解を図り、発問やワークシートに反映させたことにより、明確に児童の考えの変容や深まりを見取ることができた。
- 本研究では、児童の道徳性向上を具体的に見取るために、発言とワークシートの文章記述を中心に評価を行ってきたが、役割演技・感情曲線・グラフ・絵など、さらに多様な方法で考えを引き出す工夫を取り入れ、柔軟に評価を行うことが必要である。

#### (3) 自作の地域教材、指導事例の開発について（教材部）

- 学年の発達段階に合わせ、常滑の偉人を教材化し、該当学年の年間計画に位置付けることができた。（4年…1教材、5年…3教材、6年…2教材）
- 今後、開発した教材を使用した授業を進め、さらに改善し、地元常滑に誇りをもつ児童たちを育てていきたい。

研究構想図（資料1）



研究を支える取組(1)の詳細…外部講師を招聘した授業改善の詳細(資料2)

竹井先生からの学び

(模擬授業と講義「これならできる!議論を深める道徳授業」8月3日)

子供自ら考え、議論したくなる授業づくりを目指して

- ・授業づくりでは、内容項目、発問ありきで授業をつくらない。必ず自分の生き方につなげていかなければならない。そのためには、教材研究→児童理解→授業づくりの順で授業づくりを進めることが大切であるとお指導いただいた。(以下は、手順の詳細)

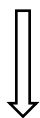
【教材研究】

- ①教材を純粹に読む。人として読む。
- ②教材中のありのままの姿(行為)とその心(行為を生む心)を見つける。
- ③中心となる内容項目とその他の内容項目を考え、関係性や関連性を構造化する。



【児童理解】

- ④子供たちと考えたいことを見つける。
- ⑤ねらいを「知(分かる)」「情(心が動く)」「意(やろうとする)」でつくる。
- ⑥ねらいと内容項目との関係性や関連性を考える。
- ⑦子供たちに問う発問を考える。



【授業づくり】

- ⑧構造化したものをもとに思考を深められる板書計画を立てる。
- ⑨授業の流れ(児童の思考プロセス)を考える。
- ⑩どこでどのようにかかわって学ぶか、どのように生き方へつなげていくか考える。
- ⑪指導案をつくる。指導細案をつくる。

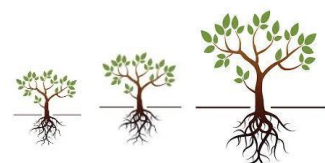
前田先生からの学び

(講義「道徳の授業にほんの少しの自信を」(9月21日, 10月10・23日))

前田先生には、3回にわたる研究授業参観と講義を通して、各テーマに対して次のように指導・助言をいただいた。

児童の成長を見取る評価の在り方 (9月21日)

- ・道徳科は、成長していく木々の根にあたる部分を担う。根の部分は見えない。これを授業で見取ろうとすることが「評価」である。
- 道徳の評価は加点式で考えるとよい。
- 本人の努力を認め、よさを蓄積していく。



根=心の内面、道徳性  
児童の成長、よさ

地域教材づくりのねらい (10月10日)

- ・導入において、「(主人公の)何がすばらしいと思う。」と問うてみたり、「(主人公の)どこが気になった」と投げかけ教材文に線を引く、読んだ感想から入るのもよい。
- ・偉人の教材を扱う場合は、主人公が困難を乗り越えた場面を大切にしたい。
- ・先人の生き方に着目させ、児童が目標をもって生きていこうという思いを抱かせたい。

多面的・多角的な考えを引き出す教師の準備と手立て (10月23日)

- ・児童が発言する際に、「なぜ」と理由を聞くことが道徳では大切になる。行動の裏に隠れている理由を聞くことで、話し合いに深まりが生まれる。

